

から15メートルのものを日本中の津波の来そうな階段に造る。総工費をやると1200億円かそのくらいで大した金額ではありません。H2A6号機が1機落ちた時に損害で起きたお金は、1200億円です。ちょうどそのくらいのお金があれば、日本中でどのくらいの人数が救えるかとやりますと、収容人員大体エレベーターに乗る人数の半分くらいの密度だったら、みんなが立っていられると。1人当たり0.36平方メートルあればいい。天井棧敷の面積をこれでやると約260人が上に乗れます。そして、これを500メートルに一本ずつ建てたって、大したお金じゃないと、これが、スマトラ沖の地震から日本が学ばなければいけない事なのに、誰も言っていない。要するに構想力がないのです。しかし、これは本当に国土交通省で、特に中部あたりは伊勢湾の辺りに早くこれをやった方がいいよ。あとは和歌山県とか、三重県は早くこれをやった方がいいです。この間、高知県に行きましたが、誰も相手にしなかったから。

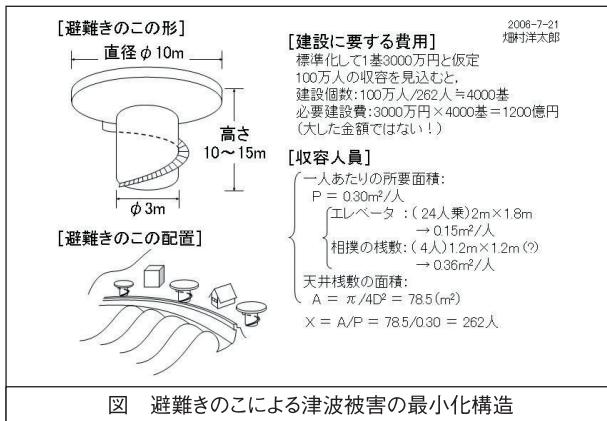


図 避難きのこによる津波被害の最小化構造

逆演算の必要性です。世の中今、うまく行く方法を一生懸命に考えて左側の方からこれをやりたいというと、きっちりと考えて、試行錯誤しますが、想定漏れが起ります。そして、その想定漏れを集めるのは、鬼です。それが、気が向くとそれを失敗の川にして本当の失敗にします。これの発生確率が先ほど言ったハインリッヒの法則です。300件に1件です。これをどういうふうに防ぐのかです。

普通、上手くやろうと思ったら純演算でこれをやったら、あれをやって、それをやるのはこれをやって、と細かくずっと考えて

いきます。しかし、本当に失敗を防ごうと思ったら、そういうやり方だけでは想定漏れがあるから、逆演算が必要です。起こった事を先に決めて、それが起こるとしたら、その前に何が起こるだろう、その前に何が起こるだろうと考える。そうすると、本当に危なくて必要な事だけが出てきます。水に流されたとしてもどんな事が起こるだろうか、地震で壊れるとなはどうだろうか、人が1000人死ぬというのはどういう事があり得るかと、人が500人死ぬというのはどういう事があり得るか、そっちを先に決めるのですよ。そして、それにあり得る物を過去の経験、あるいは論理から探してみると、相当見事に見つける事ができます。

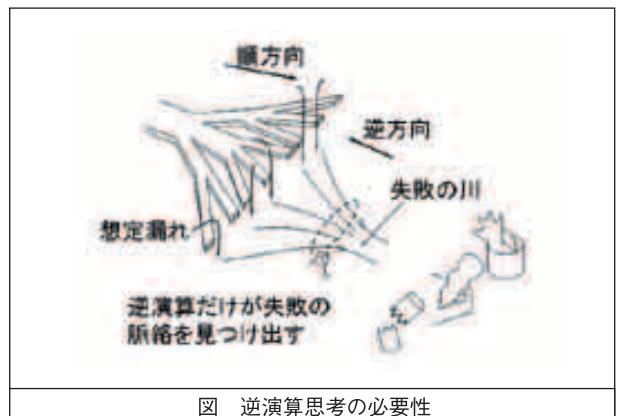


図 逆演算思考の必要性

今日ここに来る時、タクシーに乗って、僕はきた。そのタクシーの運転手に「おい、伊勢湾台風の時のこって、何かこらでしゃべっているか」と言ったら、「そんな事をいうお客様なんて、一人もいませんよ」と「お客様もの好きだね」と。「物好きでも俺は気になるのだよ」と言ったら、「何で、気になるのだ」というから、「伊勢湾台風の時に僕はまだ学生になってなくて、でも東京にいたのだけれど、助けにいきたいと思うけど自分がいっても、何もできないといわれてとても悔しい思いをしたのだ」って言ったら、「ふーん」と返事して、「私は九州から来たから関係ないよ」なんて言われて、「ああそうですか」って言うのでおしまいでした。

そんなふうに、あれは5000人亡くなったというのなら、5000人亡くなつたというのを覚えるのも一緒だけども、この頃あまり出ているように思わないけれど南の方に行った時の電信柱なんか、全部、あの時の高潮で来たのはここまで、直後は全部ペンキで